札幌室内歌劇場　第 36 回公演

喜歌劇「陰謀者たち、または家庭争議」F. シューベルト作曲

原作：「女の平和」アリストパネス作（ギリシャ喜劇）

編曲・訳詞・レチタティーヴォ作曲：岩河智子

翻案・台本・演出：中津邦仁

日時：2007 年 9 月 22 日（土）午後 6 時 30 分、23 日（日）午後 3 時

会場：札幌サンプラザコンサートホール

■ 出演

女の幸せのため身を挺して男に抗議する伯爵夫人
リュドミラ：　萩原のり子（Sop）

名誉のため家庭を顧みず戦争に明け暮れる伯爵
ヘルベルト：　則竹正人（Bar）

伯爵夫人の小間使で、ウドリンの恋人
イゼラ：　松田久美（Mezz）

伯爵の小姓で、男と女の戦いを解決に導く
ウドリン：　橋本卓三（Ten）

自分ほど不幸な女はいないと思っている新妻
ヘレネ：　百島吾弥子（Sop）

伯爵に振り回される忠実な家臣、ヘレネの夫
アストルフ：　田中　誠（Ten）

明るい女：　万城目佳奈（Sop）
暗い女：　渡辺ちか（Sop）
賢い女：　土本麻生（Sop）
幼い女：　堤　摩泉（Sop）
しつこい女：　森千絵子（Sop）
こまめな女：　三浦志緒理（Sop）
のんきな女：　倉本真理（Sop）
こまめな女の夫：　安田哲平（Ten）
明るい女の夫：　長野啓太（Ten）
しつこい女の夫：　今野博之（Bar）
暗い女の夫：　原慎一郎（Bas）

■ 室内楽

指揮：時岡牧子

フルート・ピッコロ：蠣崎路子、クラリネット：水谷若奈

トランペット：倉橋健、ヴァイオリン：富岡雅美

チェロ：川崎昌子、ピアノ：駒崎志保、チェンバロ：須藤尚美

コレペティトゥーア：伊藤桂子、岩井沙織、河野真士、渡辺桃子

舞台監督：坂本由希子、舞台美術：三宅景子、照明：吉田茂夫

ヘアメイク：藤原得代、宣伝美術：若林瑞沙

主催：NPO 法人札幌室内歌劇場、制作：福地美乃、オフィス･ワン

協賛：札幌サンプラザ 後援

後援：札幌市、札幌市教育委員会、北海道新聞社

助成：芸術文化振興基金、（財）三菱ＵＦＪ信託芸術文化財団

SPECIAL THANKS：札幌大谷大学、萩原整骨院

「陰謀者たち、または家庭争議」

F. シューベルト作曲

1823 年　　作曲
1861 年 3 月　初演（ウィーン）
1861 年 8 月　舞台初演（フランクフルト）
1993 年 11 月 27 日　日本、演奏会形式初演
（札幌、札幌、）
1994 年 9 月 18 日　日本、舞台初演（札幌、札幌室内歌劇場）

◆あらすじ

【第一幕】

序曲と、女が祈りを捧げる歌の後

No.1　戦争から戻って久しぶりに再会したウドリンと恋人イゼラ（二重唱）。ウドリンは戦争から 1 年ぶりに祖国へ戻ってきたのだった。そして騎士の称号と、自分たちの結婚が許されたことをイゼラに告げ、喜び合う。

No.2　一方、新妻ヘレネは、戦争に出かけた夫、アストルフのことを思い、嘆いている（アリア）。そこに伯爵夫人が登場。男たちに戦争をやめさせる方法が一つあると告げられる。

No.3　やがて、女たちがやってきて秘密の会議が行われる（合唱）。女装したウドリンもこっそり交じっている。伯爵夫人は、男たちが戦争をやめるまで「セックスストライキ」を実行しようと提案する。（合唱）

No.4　女たちは始めは嫌がるが、夫人の作戦に従う決意をし、固く誓い合った。（誓いの合唱）ウドリンは、イゼラに口止めされたにもかかわらず、伯爵に報告すべく走り去る。

No.5　戦争から男たちが意気揚々と帰還する（凱旋の合唱）。妻たちに会えることを楽しみにしている男たちの前に、ウドリンがやってくる。

No.6　女のストライキに怒る男たち（合唱）。伯爵は「目には目を」と、男も冷たい態度で応じる作戦を思いつく。女たち相手では勝ちめはないと思っている騎士アストルフも伯爵に従う他ない。ウドリンは、騎士の称号の授与と結婚を延期させられ落胆する。

No.7　女たちが登場し、冷ややかな態度で男たちを出迎える（出迎えの合唱）。男たちも負けるものかと女たちを無視する。男たちの予想外の態度に女たちは狼狽し、ただただ男たちが通り過ぎるのを見守るだけだった。

【第 2 幕】

No.8　男たちのつれない態度に不安になり、内部分裂する女たち。伯爵夫人に抗議しようとするのだが、伯爵夫人はあくまで強気。女たちはしぶしぶセックスストライキを継続することにする。

一方、男たちは女たちとの戦いにも勝利したと喜び、祝杯を挙げる（ワインの歌）。女のこわさを知るアストルフは泣く泣く伯爵につきあう。ウドリンの表情も暗い。伯爵は次の作戦を練るためにみなをつれて去る。

No.9　ウドリンは女たちの計画を伯爵に漏らしたことをイゼラに謝り、自分たちの結婚まで延期になったと告げる。驚き嘆くイゼラを見て、ウドリンは、男と女の戦いをやめさせる名案を考えることを決意し、イゼラへの思いを歌う。

No.10　新婚夫婦のアストルフとヘレネは、求め合う心に勝てず、密かに逢い引きする（二重唱）。しかし、ヘレネはやはり伯爵夫人や女たちとの誓いが大切と、アストルフを拒み去る。アストルフは、まちがえて伯爵夫人を襲ってしまう。

伯爵夫人は、戦争によって女は、母として、妻として、恋人として何重にも苦しめられていると嘆く。

No.11　男と女が互いに無視し合ったままの事態を打開するために、伯爵夫人は、伯爵と話し合いを始める。伯爵は戦いは夫人のためにこそ行うのだと説く（アリア）。

No.12　伯爵夫人は私のためというなら戦いよりも愛を、と訴える（アリア）。しかし、伯爵はウドリンの作戦に従い、その場を去って行く。

No.13　ウドリンは、男たちの態度は、戦いで窮地に陥ったとき「勝利を授けてくれれば、次回には女性を伴って戦争に来る。その時まで女に触れない。」と、誓ってしまったせいだと告げる。もちろんそれは、女のストライキをやめさせるための作り話であった。　しかし、伯爵夫人は、夫とともにいられるならばと、あんなにも憎んでいた戦争のための鎧を身につけ剣を手にし、戦争に行くという苦渋の選択をする。

No.14　夫人が降参してストライキを止め、頭を下げてくると思っていた伯爵は、鎧を身につけ、自分と共に戦場に出かけようとする夫人の姿をみて驚嘆する。夫人は、自分がまっ先に男に屈服したと恥ずかしがるが、他の女たちも鎧に身を包み戦地に出向こうと集まってくる。結局みなストライキの「誓い」より男への愛を選んだのだ。

伯爵は、夫人がそれほどまでに自分を愛していることや、女たちの切実な思いを知り、これからは戦争をしないと誓う。そして、ウドリンとイゼラも結婚を許される。

■作品について

音楽監督・作曲　岩河智子

この作品は、“歌曲王”としてロマンチックな作品を多く残したシューベルトに似合わないエロチックな喜歌劇のせいでしょうか、シューベルトの生前には上演されなかったオペラです。私たちは、そのシューベルトらしからぬという点にこそ注目し、このオペラを現代に通用するオペラにしようと思い取り組みました。

そこでまず行ったのが、台本の翻案です。元はジングシュピールとして作曲されているため、歌と歌の間は台詞です。その台詞というのが、旧弊な女性観に基づいているため、

今の時代に合うように書き換え、レチタティーヴォとして作曲しました。

次に、歌劇作品としての音楽の比重を高めることにしました。歌曲王シューベルトはやはり歌劇はあまり得意ではなかったのでしょう、元々の各アリア、重唱だけでは表現の量が不足しがちなのです。そこでシューベルト自身の、膨大な数の歌曲から 10 曲を選び、序曲や、台詞の BGM や、挿入歌として取り入れました。（マリアの慈悲／十字軍／草原の歌／アントニウスとクレオパトラ／私のクラヴィアに寄せて／リュートに寄せて／幽霊の踊り／酒宴の歌／小川のほとりの若者／星）

シューベルトの歌曲をよくご存じの方には、歌曲がどのように利用されているかもお楽しみいただけるのではないでしょうか。

オリジナルの「家庭争議」に比べ、曲の数は倍、上演時間も倍になったこのオペラは、「札幌室内歌劇場版『家庭争議』」です。現代の私たちなりの工夫を加えることでこそ、シューベルトがこのオペラに託した思いを一層明らかに出来たと思っています。

■ 女の知恵と勇気は未来への掛け橋

総監督・演出　中津邦仁

「君死にたもうことなかれ」で始まる与謝野晶子の詩。これは、出征した弟を心配する気持ちが表現されているものですが、軍国主義の当時は“国賊の詩”つまり体制を批判し、戦争に反対する作品と受けとられました。現在でも、反戦、嫌戦の詩の代表とされています。この詩で重要なのは、女性の素直な感覚から出た“死なないでくれ”という、切実な思いです。その思いが、人々の心に染み渡ります。

女性の切実な思いということで、もう一つ思いだすのがフランス革命時に「パンをよこせ」と国王に迫った、女たちの“ヴェルサイユ行進”。革命の口火を切ったのも、平民の女たちの、せっぱ詰まった思いだったのでしょう。また、イラクやアメリカの母親の“なんで息子が殺されなければならないのか？”という質問に為政者はだれも答えられず、涙ながらに訴えるその姿は、万人の胸中に平和を求める気持ちを生みます。

女性の感覚から出た言葉はとても強力です。男がこね繰り回す理屈を超えて、多くの人々の共感を得、世の中を動かす力にもなります。人はみな“母”から生まれたのですから、だれも“母”を否定出来ないというところに女性の思いや言葉の力強さの源があるのでしょうか。

さて、「家庭争議」では、“夫にいつも側にいてもらいたい”という妻たちの思いがコメディータッチで描かれます。その結果、男たちは武装解除し、平和な生活を送ることを誓うのです。ここでも女の“プライベートな思い”が、個人の枠を超えて世の中の状況を変える力になりました。「家庭争議」の原典である、ギリシャ喜劇「女の平和」は、女たちが切実な思いを語り行動する“反戦劇”として、イラク戦争開戦以後、各国で頻繁に上演・朗読されているようです。

オペラ「家庭争議」は、女たちの感覚こそが、男性原理の極みである“戦争”を根本から否定し、平和に至る道を示してくれる、そんな望みを抱かせてくれる作品だといえます。

■これからの公演予定

11 月 1 日（木）午後 7 時～
　時計台コンサート No.46
　「ドラマチックリート～情景・愛・祈り～」
　会場：札幌時計台 2F ホール　料金：1,000 円

11 月 4 日（日）午後 2 時予定
　文化の宅急便「オペラ“唱歌の学校”」比布町公演
　詳細未定

11 月 18 日（日）午後 2 時
　オペラ祭公開講座「楽しい音楽分析、蝶々夫人の秘密」
　講師：岩河智子
　会場：札幌市教育文化会館・研修室 401　料金：1,000 円

11 月 29 日（木）午後 7 時、30 日（金）午後 3 時
　さっぽろオペラ祭
　「音楽に描かれた聖母子像」&
　オペラ「アマールと夜の訪問者」メノッティ作曲
　会場：札幌市教育文化会館小ホール　料金 3,500 円

12 月 9 日（日）午後 2 時～
　さっぽろオペラ祭／子どもたちとの共演による
　「オペレッタ“小人の靴屋”」岩河智子作曲
　会場：札幌市教育文化会館小ホール　料金：500 円

12 月 9 日（日）午後 4 時～
　さっぽろオペラ祭「フィナーレコンサート」
　会場：札幌市教育文化会館小ホール　料金：1,500 円

12 月 21 日（金）午後 7 時～
　時計台コンサート No.47
　「クリスマスコンサート～雪の降る夜は」
　会場：札幌時計台 2F ホール　料金：1,000 円

1 月 29 日（火）午後 7 時～
　時計台コンサート No.48
　「バッハ～音楽の捧げもの」
　会場：札幌時計台 2F ホール　料金：2,000 円

3 月 1 日（土）午後 6 時半～、2 日（日）午後 3 時～
　札幌サンプラザオペラ
　「ディドとエネアス」、パーセル作曲、日本語上演
　会場：札幌サンプラザホール　料金：5,500 円、4,500 円

■募集

オペラ応援募金「ポチ募金」

正直じいさんがお餅をつくと、大判小判がざくざくと、、、「花咲爺」の昔話にならい、本物の臼と杵を手に入れました。
オペラ公演の時に、ロビーに置いておきます。
見かけた方はぜひ、大判小判のご寄付をお願いいたします！！